



一般の部 文部科学大臣賞
高山 恵利子さん
受賞インタビュー

ライター 上村 雅代

第5回日本語大賞表彰式（2014年2月23日）の一般の部、文部科学大臣賞を受賞した高山恵利子さんに、お話を伺いました。

受賞作「パパが好き」は、ブールの受付係として働いている高山さんの体験を鋭い視点で綴った傑作です。

彼女は、両親と来場した少女の「あたしはパパが好きなの。だからこっち」という言葉に衝撃を覚えます。それがきっかけで自らの父との関係を振り返り、父が亡くなった時の侘しさが、「好き」と伝えられないまま逝ってしまったことにあると気付かされます。

その後、母が逝ったとき、高山さんは人目も憚らず、「母ちゃん大好きだよ」と叫んでいました。

けれども実は、母が嫌いだった。

ここから話は、思わぬ方向に展開します。無欲な父親を立派だと思っ程、母を強欲だと嫌うようになり、死の間際に「母ちゃん大好き」と言ったのは、うしろめたさ故だったかもしれない、と振り返ります。

人は他人に対しては感謝やねぎらいの言葉を素直に表現できるのに、肉親には気持ちを伝えずに日々を過ごしています。少女の言葉は私たちに、目に見えぬ想いを言葉にすることが必要と教えてくれました。



群馬県在住の彼女は、55歳まで事務としてお務めを続け、生活のために働き詰めだったそうです。子どもが社会人になったのを機に仕事を辞め、「今度は自分の時代を生きよう」と、やりたかったロードバイクにのめり込みました。

「働いて、自分の好きなことをしないで日々の生活だけで生きてきたけれど、私が私である証拠を残してからでないと死ねない。何かもがいてから死にたい、何でも良い、熱中することをやってから」

ロードバイク同様、仕事を辞めて最初の1年は、「狂ったように書きまくった」年でもあったといいます。元々書くことが大好きだったけれど、書きたい気持ちを抑えて仕事に邁進してきたという彼女の想いがドットと溢れ出たようです。

受賞について何うと、嬉しいけれど「なぜ？これでいいの」という気持ちのほうが多いといいます。普段は書いたものを推敲し、時間を掛けて書き直すけれど、この作品は本当に書きっぱなしだったからです。

授賞式で選評をした選考委員の方が小学生の受賞者に対し、「何の技巧も無い」を褒め言葉で言っていたけれど、「人の心を惹き付けるとは、そういうことなのか、と思った」。

これまで私は上手に見せようといじりすぎていたのかもしれませんが。文章中に同じ表現が重ならないようにしたいとか、他の人が使わないような比喩を使いたいとか。私は文章をこねくり回して自分を頭良く見せようとしていたのかもしれませんがね、と振り返ります。

プロフィール



上村雅代（かみむら まさよ）

ライター。1980年8月7日生まれ。芥川賞作家・荻野アンナ氏の助手として働きながら文章の研鑽を積む。『大震災 欲と仁義』荻野アンナとゲリラ隊（共同通信社）共著。現在、息子（4歳）の育児奮闘中



学生の部の朗読を聴いて、「あれを見て勉強しようと思った」「正直に、素直に書けば良いんだって、小学生みたいに素直に教わりました」。

退職から数年、プールで受付係をするようになって1年が経つといいます。月に8回の仕事は、生活の良いアクセントになり、楽しいそうです。そこにあの少女がやってきて、受付の台の上に顎をのせて、高山さんの方を見て、「パパが好き」と喋ったのです。

何気ない少女のひとことを、高山さんは迎え入れ、咀嚼し、そこから両親との関係を振り返り、身内への想いを言葉にして伝えていきたいと想いを新たにしています。

少女が発した「パパが好き」という言葉にその力があつたのでしょうか。いえ、そうではないでしょう。自分に向けられて発せられた言葉だけでなく、たまたま横をかすめた言葉までも捕まえる、高山さんの感度抜群の言葉のアンテナがあつてこそ、この奇跡のような作文が生まれたのだと思います。

「成熟した人間の穏やかさを持っている」父に対し、母には未熟な人間の身勝手さがあつた、と高山さん。けれど、これはもしかしたら女性が皆持っているもので、合わせ鏡なのかもしれない。結局、自分を嫌っているのかも、と思い返します。それに母のエネルギーに父が引っ張られたところもあり、どちらが正義ということはない。ただ「嫌い」というだけだ、ともいいます。

作中にあるように、高山さんとお母さんとの関係は、複雑な想いが入り交じるものでしたが、「私たちが特別なのではない。どこにでもある母と娘の葛藤だろう」と彼女は言います。男の人は母親に対し、聖母マリア像のようなイメージを持っているかもしれないが、女性の母に対する気持ちはもっと複雑なもの。同性としても厳しく見てしまうところがある。

現に高山さんとお嬢さんとの関係を見ても、傷口を踏みこむようなことを言い合つたと思えば、一緒にご飯を食べに行ったりして非常に仲が良かったりと単純ではありません。

いつの時代も同じことを繰り返している、「母と娘の愛憎の連鎖ね」と高山さんは笑いますが、深い言葉です。

高山さんの作文が入賞したことに対し、お嬢さんは、今まで苦勞してきた分のご褒美だ、とおっしゃつたといいます。日本には察する文化があるけれど、当たり前なことでも、「言葉に出してもらおうとひどく嬉しいもの。分かっていることでも、それだけで嬉しい。それが言葉の力」だと高山さん。

受賞を通じて学んだ、「想いを伝えるには、こね回さずに素直な言葉が有効」という目からウロコの気付き。そして「想いを言葉にして相手に伝えること」の大切さ。

高山さんの作文は、読み手の心を揺さぶると、私も太鼓判を押したいです。早速今日、私も親や夫に対して想いを言葉にして伝えよう、そう思いました。



パパが好き

群馬県 高山 恵利子（たかやま・えりこ）

水着の袋を持った少女は「あたしはパパが大好きなの。だからこっち」と私に告げて、男子更衣室を指さした。傍らのパパは初恋の相手から告白を受けた少年のように、はにかんだ笑顔で私に目礼をする。少女を抱き上げ男子更衣室に消えた。後ろで見ていたママも満足そうな笑みを残して、一人反対側の女子更衣室へ向かった。

私はプールの受付係をしている。両親と来場する幼い子供のほとんどは、母親と一緒に女子更衣室で着替える。複数の子供を持つ母親の場合は、父親がその上の子を担当することはあるが、母を差し置いて、父と一緒に男子更衣室に入る子はいない。けれどその少女は違った。しかも男子更衣室に入りた理由で、パパが大好き」という端的な言葉で表現した。言い終えたあとの少女の瞳の輝きと、パパの汗ばんだ誇らしげな表情が、私は今も忘れられない。「好き」と名指された父親も、素直な気持ちを伝えた少女自身も、幸福にしましう言葉の不思議さを目の当たりにして、私は言葉が持つ能力を思い知らされた気がした。

少女はその率直さで、きつと家でも毎日のように「あたしはパパが好き」と言い続けているに違いない。それでも頬を上気させ反逆してしまうパパ。パパがうがなのではなく、「好き」という言葉が持つ力のようには思える。どうやら「好き」という言葉に対して、免疫力を持たないらしい。毎日言われてもなお新鮮な感動をもたらす不思議な言葉なのだ。「好き」とは、人の強欲さ、意地悪さ、ずるさ、臆病さ、容姿までも、すべてを肯定し、その人間を無条件で受け入れるという意思表示。底知れぬ寛大さを秘めた言葉だ。もちろん少女はその言葉の魔力さえも知らず、パパへの熱烈な思いのたけを、一言で表現したに過ぎない。こんなにも人を恍惚とさせる「パパ大好き」という言葉に、私は清々しい感動を覚えた。

私も父が大好きだったが、子供の頃父に「好き」と言った記憶はない。互いに年を重ねてからも、父娘の常で、そつけない会話を交わすだけの間柄のまま、父は逝ってしまった。最期にさうして「父ちゃん」というのに、何か寂然とした思いが残つた。私が大好きな父にあえて「好き」と言わなかったのは、その事実を私自身が良く知っていたから、でも言葉にしない私の気持ちを、父が分かってくれたのだろうか？ 父が亡くなった後も消化不良のような作しさが、「好き」と言えなかつた後悔があることに、私は少女によつて気付かされた。「パパ大好き」と言う少女の言葉を聞いたとたん、父の死の間際に、私が探していた言葉だと思つたのだ。私に少女のような素直さがあつて、正直に「父ちゃん大好きだよ」と言つて父の後を追うように母が逝つた時、私は「母ちゃん大好きだよ」と叫んでいた。病室に兄妹や甥や姪がいたのに、照れもせず正直な心を吐露した。私が差し出したアイスクリームを、大きな口を開けて力強く食べた母の姿がただ嬉しくて、思いのたけをこめた言葉だつた。昼においしそうにアイスクリームを食べた母は、夜には帰らぬ人となった。けれど父の時のような後悔はなく、晴れやかな哀しみだつた。

実をいうと、私は母が嫌いだった。人並みの暮らしを十分とする無欲な父と、それ以上を望む強欲な母。父を立派だと思えば思うほど、私は母が嫌いになった。温厚な父が村の世話役に借り出されると、一人畑から戻る母は不機嫌で、おそくに帰ってきた父が申し訳なきさうにねぎらいの言葉をかけても、一言もしやべらなかつた。ニコリもしない母は、こけた顔と地味な服のせいで、猫背気味の薄つべらな体が西洋の魔法女みたいに見えた。母は子供にも厳しく、家中が働いているときだけ機嫌が良かった。寸暇も惜しみ起きているあいだずっと働き続けようとする母を、私は子供心に醜いと思った。大人になつてからも、私が母に寛大になることはなかつた。相変わらず、強欲でわがままな母が大嫌いだつた。強欲でわがままという言葉が、そのまま自分に当てはまるとも気づかず、私は長い間母を嫌っていた。死の間際に「母ちゃん大好き」と言つたのは、そのうしろめたさだつたのかもしれない。「好き」と言つてしまった後でも、やっぱり私は母が嫌いだと思つた。けれど私は嘘をついたのではない。私は本当に母が嫌いで、母が好きだったのだから、母への「好き」は、「ごめんなさい」の意を含んだ複雑な想いの結晶だつた。

「あたしはパパが好き」という少女の一言は、私が父母へ感謝の想いを伝えられたか考える良い機会になった。父に言えなかつた純粋な想いと、母には伝えられた複雑な想い。どちらも同じ「好き」という単純な言葉で表現できるということが、私には大きな驚きだつた。「好き」という素直な言葉が持つ能力を、私は改めて認識した。

人は他人に対しては、感謝やねぎらいの気持ちを素直に表現できるのに、近しい人間に対して心の内を明かさな。せいぜい「ありがとう」と言うのが精一杯だ。日常生活に必要な意思疎通にばかり偏つて、気持ちを伝えずに毎日を通している。「あたしはパパが大好きな」公言してはばからない少女の在りようこそ、いつも言葉に出して確かめる必要があることを教えられた。流動的で不確かなの心の在り日本人が、心の在りようを伝える手段は言葉しかない。

私もいつか家族に看取られる日がくる。そのとき「お母さん大好きだよ」とだけ言ってもらえたら、私は静かな眠りにつけそうに気がする。